

Y02b 日本中国の文献から探る超新星の明るさの変化

齊藤秀樹（長野市立博物館）

百人一首で有名な鎌倉時代の歌人、藤原定家（1162-1241）によって19歳から80歳まで書き綴られた「明月記」には、天文記録が100例以上も紹介されている。その中で、客星（彗星、新星、超新星）の出現記録は特に重要である。客星出現記録が13例あるうち、超新星については3例の記述がある。望遠鏡のない時代の超新星の出現記録は世界中でも7例しかない。そのうち3例の記述があるのは世界で明月記だけである。平成12年（2000）、歴史上・芸術上価値が高いもの、また学術的に価値が高いものとして文化財保護法に基づき、明月記は国宝に指定された。

変光星観測の歴史的な歩みの中に、1054年に超新星爆発を起こしたとされるかに星雲がある。当時、昼間でもかなり明るくなったとされるこの超新星の記録が藤原定家の日記「明月記」および中国の文献「宋史」に残っている。これらの文献から、ごく大雑把に1054年の超新星の明るさの変化を再現した。

1054年7月頃、夜中に突如として現れた光は、東の空おうし座あたりに見え、木星ほどの明るさだったという。その後、約1年でしだいに暗くなった。最も明るい時で23日間は昼間でも発見できるほど明るかったと記録されている。まさに金星のようだった。そして、約2年後の1056年4月頃には見えなくなってしまったと記録されている。